今宿五郎江14

—今宿五郎江遺跡第14次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1182集

2013

福岡市教育委員会

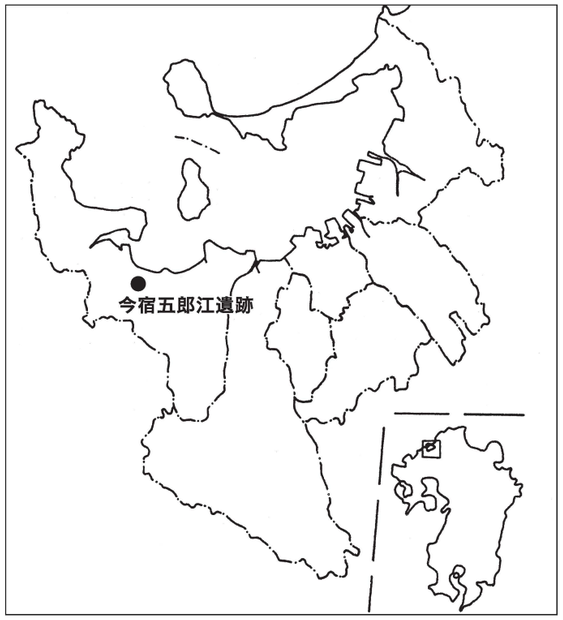
今宿五郎江14 —今宿五郎江遺跡第14次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一八二集 二〇一三 福岡市教育委員会

IMA JUKU GO ROH E

今宿五郎江 14

—今宿五郎江遺跡第14次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1182集



遺跡略号 IZG－14
調査番号 1102

2013

福岡市教育委員会

今宿五郎江遺跡周辺調査区航空写真

＊デジタル合成写真
＊上が北

（１）調査区全景（上空から）　＊上が北

（２）調査区全景（南上空から）

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、本市の伊都土地区画整理事業に伴い調査を実施した今宿五郎江遺跡第14次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に弥生時代の集落跡を確認すると共に、多数の土器などの生活用具が出土しました。これらは、当時の今宿地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、本市住宅都市局伊都区画整理事務所をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成25年3月22日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長　酒 井　龍 彦

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い、福岡市西区今宿町75-2外において発掘調査を実施した今宿五郎江遺跡第14次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理･報告書作成は、令達事業として実施した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣･辻節子が行った。
5．本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本･井上加代子が行った。
6．本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7．空中写真撮影およびデジタルモザイク合成は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
8．本書に掲載した挿図の製図は、榎本・清金良太・井上が行った。
9．本書に掲載した国土座標値は、日本測地系（第Ⅱ座標系）によるものである。
10．本書で用いた方位は座標北で、真北より0°18′西偏する。
11．遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
12．遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
13．本書に関わる記録･遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
14．本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺　跡　名	今宿五郎江遺跡	調　査　次　数	第14次	遺　跡　略　号	IZG－14
調 査 番 号	1102	分布地図図幅名	今宿112	遺跡登録番号	020626
申請地面積	1,310,000.0㎡	調査対象面積	714.0㎡	調　査　面　積	834.2㎡
調　査　地	福岡市西区今宿町74-1、74-2、75-2、75-3			事前審査番号	13－1－233
調 査 期 間	平成23(2011)年4月19日～7月13日				

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 7
　1．概要 …… 7
　2．遺構と遺物 …… 7
　　1）掘立柱建物（SB） …… 9
　　2）竪穴住居（SC） …… 12
　　3）土坑（SK） …… 15
　　4）溝（SD） …… 17
　　5）その他の遺物 …… 20
　3．結語 …… 20

挿　図　目　次

第１図　今宿五郎江遺跡位置図（1/25,000） …… 3
第２図　伊都土地区画整理事業地内調査区位置図（1/10,000） …… 4
第３図　調査区位置図（1/2,000） …… 6
第４図　調査区全体図（1/200） …… （折り込み）
第５図　SB021・022実測図（1/60） …… 8
第６図　SB021・022出土遺物実測図（1/3） …… 9
第７図　SB023・024実測図（1/60） …… 10
第８図　SC003実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/1、1/3） …… 11
第９図　SC006・007・015実測図（1/60）およびSC006出土遺物実測図（1/2、1/3） …… 12
第10図　SK008・009・010・053実測図（1/20、1/40） …… 13
第11図　SK008・009出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4） …… 14
第12図　SK010・053出土遺物実測図（1/3、1/4） …… 15
第13図　SD001・011・012・016実測図（1/40） …… 16
第14図　SD001・002・011・012・013・016・076出土遺物実測図（1/3） …… 17
第15図　ピット出土遺物実測図（1/2、1/3、1/4） …… 18
第16図　SX004出土遺物実測図（1/1、1/3、1/4） …… 19
第17図　遺構検出時出土遺物実測図（1/2、1/3） …… 20

図　版　目　次

巻頭図版１	今宿五郎江遺跡周辺調査区航空写真	
巻頭図版２	（１）調査区全景（上空から）	（２）調査区全景（南上空から）
図　　版１	調査区全景（上空から）	
図　　版２	（１）SB021（北から）	（２）SB022（南から）
	（３）SB023（東から）	（４）SB024（東から）
	（５）SC003（南から）	（６）SC006（東から）
図　　版３	（１）SC007（東から）	（２）SK008（南から）
	（３）SK009（北西から）	（４）SK010（南西から）
	（５）SD001（南東から）	（６）SD001a－b土層（西から）
図　　版４	（１）SD001c－d土層（南東から）	（２）SD001e－f土層（北西から）
	（３）SD011（南西から）	（４）SD012（北西から）
	（５）SD013（東から）	（６）SD016o－p土層（南から）
図　　版５	出土遺物（１）	
図　　版６	出土遺物（２）	

表　目　次

第１表　伊都土地区画整理事業地内調査一覧表 …… ５

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成8（1996）年11月8日付、伊区第8号にて福岡市都市整備局（現 住宅都市局）伊都区画整理事務所計画課長より同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛に西区今宿町、大字女原、大字徳永地内における「福岡都市計画事業 伊都土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼がなされた。同事業は、本市西部の新たな拠点として位置付けられている同地域130.4haを対象に都市基盤や交通結節機能の整備、良好な住宅地の供給を目的として計画的な市街地整備を推進するもので、平成8年10月14日に都市計画決定（平成13年10月5日に都市計画変更）、平成9年9月18日に事業計画決定（平成23年7月21日に事業計画変更）がなされた。また、事業の施工は平成9年度に始まり、同25年度終了予定である。これを受けて同課では、事業地内の南側丘陵裾部には今宿五郎江遺跡や大塚遺跡等の複数の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することや広範な地内に未周知の包蔵地が存在する可能性があること等から事業地全域での試掘調査が必要であると判断し、平成8年12月から翌平成9年3月に収穫の終了した田畑を主な対象地として計68箇所でトレンチによる試掘調査を実施した。

その結果、事業地北側の砂丘後背地では埋蔵文化財は確認できなかったが、従来の包蔵地範囲である南側丘陵部や丘陵間の谷部沖積地で埋蔵文化財の分布を確認できた。なお、この試掘調査の対象が事業地の約2/3のうち宅地等を除いた田畑であったことから、今回の対象範囲外や埋蔵文化財分布確認地域での詳細な範囲については、事業者による用地交渉や建物移転等の状況を把握しながら、随時試掘調査を追加実施し、確認を進めていくこととなった。この試掘は本調査と併行しながら、平成24年7月まで継続した。また、事業者との協議の上、事業地内で埋蔵文化財が確認された場合、道路や水路等の構造物設置箇所に加え、換地後の地権者の不公平を解消するため宅地部分についても造成のあり方を問わず記録保存のための本調査を実施することとなった。なお、同事業関係の埋蔵文化財本調査は平成14年12月の今宿五郎江遺跡第8次調査にて開始し、平成24年12月の大塚遺跡第22次調査をもって完了した。

今回報告する今宿五郎江遺跡第14次調査は、東側隣接の同第11次調査、西側隣接地の大塚遺跡第9次調査の成果を受けて、書類上本調査を要すると判断したもので、家屋等の解体後、平成23年4月19日から714.0㎡を対象として教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課が調査を実施することとなった。また、整理･報告書作成は、経済観光文化局に組織移管した文化財部埋蔵文化財調査課が翌平成24年度に行い、これらにかかる費用は事業主体である住宅都市局が負担した。

2．調査の組織

調査委託：福岡市住宅都市局　伊都区画整理事務所
調査主体：福岡市教育委員会　文化財部
調査総括：埋蔵文化財第2課長　田中壽夫
　　同課調査第2係長　菅波正人
調査庶務：埋蔵文化財第1課管理係　古賀とも子
事前審査：埋蔵文化財第1課長　濱石哲也
　　同課事前審査係長　宮井善朗
　　同課事前審査係主任文化財主事　加藤良彦
　　同課事前審査係文化財主事　今井隆博
調査担当：埋蔵文化財第2課主任文化財主事　榎本義嗣
整理作業：木本恵利子　窪田慧　松尾真澄

Ⅱ．遺跡の立地と環境

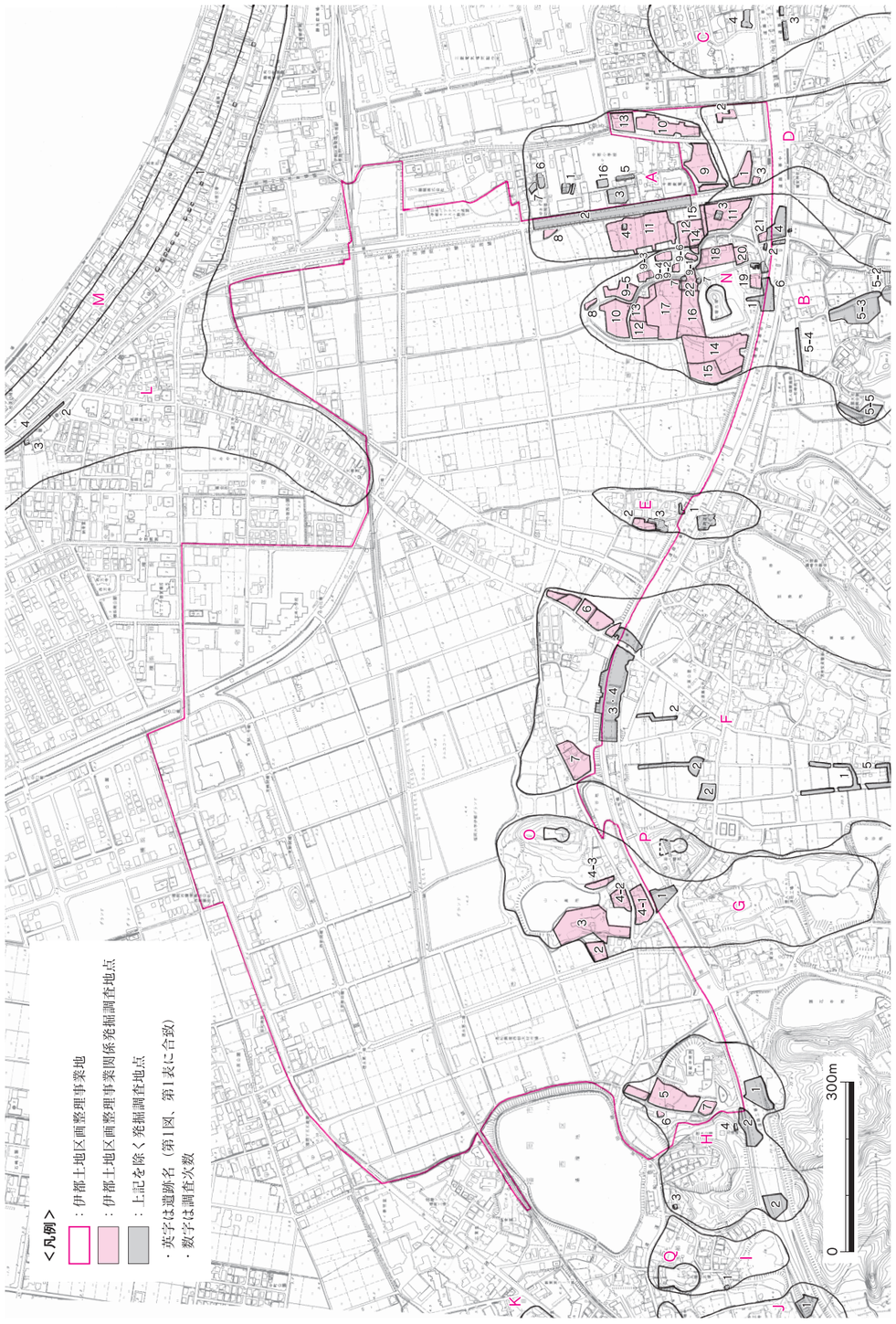
玄界灘に北面し、背後に背振･三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する今宿五郎江遺跡は、このうち西部の今宿平野に位置する。東西約3km、南北約2kmの同平野の南側には高祖山の山塊がひかえ、東側には背振山系から北側に派生する叶岳･長垂山塊が延びて、東側の早良平野と画される。また、北側は今津湾に沿って長垂山の西側から今山の南東部に砂丘が弧状に発達する。その南側の後背地はかつて端梅寺川河口に湾入する内海の東側にあたり、潟湖が拡がっていた。この平野の東部には高祖山と叶岳の間に扇状地形が発達し、その中央部を鮫川が北流する。また、西部は潟湖に面して高祖山山麓から北側に向かって低丘陵が八手状に派生し、丘陵間には狭隘な谷が開析する。なお、平野北側から北西側に拡がっていた内海や潟湖は沖積地化と近世の干拓事業によって水田化が進められてきた。

今回の調査要因である伊都土地区画整理事業の範囲は、平野の中央部から西側に位置し、北部の大半は潟湖であった砂丘後背地を多く含むものの、南側は高祖山山麓の丘陵と谷部を占める。後者では事業地の東から谷遺跡、今回報告の今宿五郎江遺跡、大塚遺跡、女原笠掛遺跡、女原遺跡、徳永B遺跡、徳永A遺跡の各遺跡が主に丘陵上に展開する。また、この丘陵端部付近には、「今宿古墳群」として国史跡に指定されている前方後円墳が占地し、西側の徳永B遺跡の北東丘陵端部には若八幡宮古墳に次ぐ首長系譜にある山ノ鼻1号墳が、東側の大塚遺跡の丘陵頂部には6世紀初頭から前半に築造された大塚古墳が所在する（第2図）。また、第1表のとおり、これら事業地内では平成14（2002）年度から平成24（2012）年度にかけて同事業関係の発掘調査を7遺跡35地点で実施し、その面積は約67,000㎡におよぶ。詳細は刊行の進む各報告書に拠られたいが、ここでは、今回報告する今宿五郎江遺跡を中心に、隣接する大塚遺跡や谷遺跡を含めて、調査成果を概観しておきたい（第3図）。

今宿五郎江遺跡は、砂丘後背地に向かって北側に延びる低位段丘に位置する。北側は潟湖に面し、東側には谷地形が拡がる。また、南側は狭い谷部を挟み、不安定な微高地上に位置する谷遺跡と対峙する。西側は複数の谷が北側から入り込み、本遺跡西側の中位段丘上の大塚遺跡との間には、同遺跡第9･18次調査で確認されている比較的大きな谷部が開析する。この東側には、本調査や12次（以下、次数のみの記述は今宿五郎江遺跡）、大塚遺跡第9次調査が行われている舌状の段丘が延び、その東側の狭隘な谷地形によって、本遺跡の大半を占める段丘と分かたれる。この谷地形は弥生時代中期末から後期初頭に掘削される環濠の西側部分として利用が図られていることが、第11･12･15次調査で明らかとなっている。また、大塚遺跡第11次や第9次調査では、環濠の南側部分が検出され、後者は先述の谷遺跡との谷部北側の段丘裾に相当する。また、第10・13次調査では、東側の段丘端部を巡るように掘削される環濠が確認され、後者では幅5m程度の陸橋が検出されている。環濠の北側部分は判然としないが、第1次調査の溝との連続性を想定すると、南北約270m、東西約200mを測る楕円形状の平面形を呈することとなるが、第11次調査の北西部では環濠の端部が確認されており、後背地側に開く形状も考えられる。なお、この環濠は弥生時代終末期頃には埋没し、機能を失っている。この環濠内部には、弥生時代中期後半から遺構が認められ、少数の竪穴住居と多数の掘立柱建物で構成される集落が環濠埋没前後まで展開する。出土遺物には多数の在地の弥生土器の他、瀬戸内系、近畿系、東海系などの列島内の土器や楽浪系および三韓系土器、後漢鏡、鋳造鉄斧、貨泉等の大陸系舶載遺物があり、伊都国の対外交易の拠点集落として位置付けられる。また、当時の生産域は、水田遺構が未検出であるものの、谷遺跡や第10・13次調査における水利施設等の確認から環濠の南側から東側の沖積地に拡がることも判明している。なお、集落域は環濠埋没前後に環濠外の西側や南側の段丘上にも拡大するが、古墳時代前期には途絶える。その後、古代に至って、遺構は明確でないものの、東側段丘裾に形成された包含層から越州窯系青磁や緑釉陶器、古代瓦、銅製印章等が出土しており、段丘上の東部には公的な施設が所在した可能性がある。また、中世後半期の集落が北端の第6・7・8次調査で確認されており、第7次の遺構検出状況から更に北側に範囲が拡大する可能性が高い。

＜参考文献＞
森本幹彦 2010「今宿五郎江遺跡の成立とその背景」『福岡考古』第22号 福岡考古懇話会

第１図　今宿五郎江遺跡位置図（1／25,000）



第２図　伊都土地区画整理事業地内調査区位置図（1／10,000）

A　今宿五郎江遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	8406	1984. 8.29～1984. 9.25	校舎	261.0 ㎡	弥生・古墳・中世	『今宿五郎江遺跡Ⅰ』福岡市132集 1986年
2次	8407	1984.11. 1～1985. 3.31	福岡志摩前原線	6,000.0 ㎡	弥生中期～後期・中世	『今宿五郎江遺跡Ⅱ』福岡市238集 1991年
3次	8728	1987. 9.10～1987.11.26	給油所	900.0 ㎡	弥生中期～後期	『今宿五郎江12』福岡市1180集 2013年
4次	9253	1992. 2. 8～1992. 2.20	鉄塔	81.0 ㎡	弥生中期～後期	『今宿五郎江遺跡Ⅲ 徳永A遺跡Ⅲ 丸隈山遺跡群Ⅰ』福岡市479集 1996年
5次	0055	2000.12.19～2001. 1.31	プール	150.0 ㎡	弥生中期～後期・中世	『今宿五郎江遺跡Ⅳ』福岡市737集 2003年
6次	0124	2001. 9.12～2001.10.16	共同住宅	385.0 ㎡	中世	『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.16 福岡市 2003年
7次	0158	2002. 2.18～2002. 3. 6	共同住宅	386.0 ㎡	中世	『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.16 福岡市 2003年
8次	0254	2002.12.22～2003. 1. 8	伊都区画整理	297.0 ㎡	中世	『今宿五郎江5』福岡市872集 2006年
9次	0255	2002.12.22～2003. 3.31	伊都区画整理	3,520.0 ㎡	弥生中期～後期	『今宿五郎江5』 福岡市872集 2006年 『今宿五郎江6』 福岡市924集 2007年
10次	0420	2004. 5.24～2005. 7. 6	伊都区画整理	2,998.0 ㎡	弥生後期・平安	『今宿五郎江7』福岡市1009集 2008年　『今宿五郎江10』福岡市1110集 2011年 『今宿五郎江11』福岡市1137集 2012年
11次	0531	2005. 7. 8～2006.12. 9	伊都区画整理	6,900.0 ㎡	弥生後期	『今宿五郎江13』福岡市1181集 2013年
12次	0655	2006.12. 1～2007. 3. 9	伊都区画整理	1,340.0 ㎡	弥生中期～古墳初頭	『今宿五郎江8』福岡市1066集 2010年
13次	0718	2007. 6. 1～2007.10.23	伊都区画整理	820.0 ㎡	弥生中期～後期 古代	『今宿五郎江9』福岡市1109集 2011年
14次	**1102**	**2011. 4.19～2011. 7.13**	**伊都区画整理**	**834.2 ㎡**	**弥生時代後期**	**本報告**
15次	1121	2011. 8.19～2011.11. 7	伊都区画整理	400.0 ㎡	弥生時代後期	『今宿五郎江15』福岡市1183集 2013年
16次	1220	2012.10. 6～2012.10.25	校舎建設	203.0 ㎡	弥生時代	整理中

B　大塚遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	7317	1974. 1.18～1974. 2. 4	今宿バイパス	130.0 ㎡	中世	『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 5集』福岡県 1977年
2次	7318	1974. 1.28～1974. 2.16	今宿バイパス	96.0 ㎡	弥生後期	『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 5集』福岡県 1977年
3次	8101	1982. 2. 1～1982. 2.28	鉄塔	400.0 ㎡	弥生中期末～後期	「付録　大塚遺跡第３次」『野方塚原遺跡』福岡市490集 1996年
4次	8236	1982. 4.26～1982. 6.17	今宿バイパス	2,000.0 ㎡	弥生後期～古墳前期・奈良	『今宿バイパス関係埋蔵文化財報告 10集』 福岡県 1984年
5次	8201	1983. 1.17～1983. 4.28	圃場整備	7,500.0 ㎡	古墳後期	「位置と周辺の遺跡」『丸隈山古墳Ⅱ』 福岡市146集 1986年
6次	8640	1986. 9.24～1986.12.29	今宿バイパス	1,350.0 ㎡	中世	『大塚遺跡・女原遺跡』福岡市224集 1990年
7次	8944	1989. 8.30～1989. 9.26	個人住宅	133.7 ㎡	中世	『大塚遺跡第7次調査』福岡市256集 1991年
8次	0528	2005. 6.10～2005. 6.30	伊都区画整理	347.0 ㎡	古代	『大塚遺跡3』福岡市1025集 2009年
9次	0631	2006.11. 7～2007. 3.27	伊都区画整理	2,050.0 ㎡	弥生中期～後期・古墳前期	『大塚遺跡6』福岡市1185集 2013年
10次	0659	2006.12. 8～2007. 3.14	伊都区画整理	2,789.0 ㎡	古代後期	『大塚遺跡3』福岡市1025集 2009年
11次	0662	2007. 2. 1～2007. 9.10	伊都区画整理	4,018.0 ㎡	弥生後期・弥生終末期	『大塚遺跡6』福岡市1185集 2013年
12次	0702	2007 .4. 9～2007. 5. 7	伊都区画整理	800.0 ㎡	古代後期	『大塚遺跡3』福岡市1025集 2009年
13次	0715	2007. 5.16～2007. 7. 6	伊都区画整理	1,276.0 ㎡	平安末・中世末	『大塚遺跡3』福岡市1025集 2009年
14次	0726	2007. 7.12～2008. 2. 1	伊都区画整理	6,200.0 ㎡	弥生終末期・古墳中期前半	『大塚遺跡4』福岡市1111集 2011年
15次	0769	2008. 2.28～2008. 5. 8	伊都区画整理	1,830.0 ㎡	古代・中世	『大塚遺跡4』福岡市1111集 2011年
16次	0806	2008. 4. 1～2008. 8.18	伊都区画整理	2,095.0 ㎡	弥生後期・中世末	『大塚遺跡5』福岡市1144集 2012年
17次	0855	2009. 1.13～2009. 8.19	伊都区画整理	5,200.0 ㎡	中世末	『大塚遺跡5』福岡市1144集 2012年
18次	1117	2011. 7.25～2012. 6. 7	伊都区画整理	1,968.0 ㎡	弥生後期・中世	整理中
19次	1202	2012. 4. 4～2012. 4.10 2012. 6.11～2012. 8.30	伊都区画整理	676.2 ㎡	中世	整理中
20次	1216	2012. 8. 6～2012.11.30	伊都区画整理	600.0 ㎡	中世前半～末	整理中
21次	1218	2012. 9. 2～2012.10.26	伊都区画整理	250.0 ㎡	弥生終末期・古墳終末期	整理中
22次	1219	2012. 9. 5～2012. 9.28 2012.11. 5～2011.12.17	伊都区画整理	580.2 ㎡	弥生後期・中世後半	整理中

D　谷遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	0255	2002.12.26～2003. 3.28	伊都区画整理	1,560.0 ㎡	古墳後期	『今宿五郎江5』福岡市872集 2006年
2次	0512	2005. 5.28～2005. 7. 6	伊都区画整理	422.0 ㎡	弥生後期・古墳後期	『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.20 福岡市 2007年
3次	0862	2009. 3. 2～2009. 4. 9	伊都区画整理	290.0 ㎡	弥生後期～古墳前期	『谷遺跡2・女原遺跡5』福岡市1151集 2012年

E　女原笠掛遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	7316	1974. 2. 4～1974. 3. 2	今宿バイパス	150.0 ㎡	古墳時代	『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集』福岡県 1977年
2次	1035	2011. 1.13～2012. 3.30	伊都区画整理	237.0 ㎡	古代	『女原瓦窯跡』福岡市1208集 2013年
3次	1204	2012. 4.23～2012.12.26	確認調査	212.8 ㎡	古代	『女原瓦窯跡』福岡市1208集 2013年

F　女原遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	8517	1985. 5.27～1985. 8.12	圃場整備	3,000.0 ㎡	古墳中期～後期・中世	『女原遺跡4』福岡市1053集 2009年
2次	8626	1986. 7.14～1986. 9. 4	圃場整備	2,270.0 ㎡	古墳時代	『福岡市埋蔵文化財年報』－1986年度－ 福岡市 1988年
3次	8660	1986.11.10～1987. 3.31	今宿バイパス	5,550.0 ㎡	古墳時代・古代末～中世	『大塚遺跡・女原遺跡』福岡市224集 1990年
4次	8720	1987. 7. 1～1987.10.31	今宿バイパス			
5次	9746	1997.10. 7～1997.10.27	個人住宅	282.0 ㎡	古墳後期・中世～近世	『橋本一丁目遺跡・女原遺跡』福岡市616集 1999年
6次	0625	2006. 6.14～2006.11. 1	伊都区画整理	3,185.0 ㎡	古墳中期～後期	『女原遺跡3』福岡市1010集 2008年
7次	0920	2009. 8.21～2009.11. 9	伊都区画整理	2,400.0 ㎡	古墳後期	『谷遺跡2・女原遺跡5』福岡市1151集 2012年

G　徳永Ｂ遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	8808	1988. 4.10～1988. 6.10	今宿バイパス	1,280.0 ㎡	中世	『徳永遺跡』福岡市242集 1991年
2次	0750	2007.11.14～2008. 2.25	伊都区画整理	682.5 ㎡	縄文中期・古墳中期 平安前期・中世	『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.22 福岡市 2009年
3次	0922	2009. 9. 7～2010.11.19	伊都区画整理	5,930.0 ㎡	古墳時代～中世	『徳永B遺跡』 福岡市1190集 2013年
4次	1133	2011.11.15～2012. 8.31	伊都区画整理	2,700.0 ㎡	古墳時代・中世～近世	整理中

H　徳永Ａ遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	8808	1988. 6. 1～1988.10. 6	今宿バイパス	1,710.0 ㎡	中世	『徳永遺跡』福岡市242集 1991年
2次	8846	1989. 1.17～1989. 3.31	今宿バイパス	2,070.0 ㎡	古墳時代	『徳永遺跡(Ⅱ)』福岡市306集 1992年
3次	9354	1994. 1. 8～1994. 2.12	鉄塔	100.0 ㎡	古代	『今宿五郎江遺跡Ⅲ 徳永A遺跡Ⅲ 丸隈山遺跡群Ⅰ』福岡市479集 1996年
4次	9552	1996. 2. 5～1996. 3.28	今宿バイパス	300.0 ㎡	古墳時代～古代	『国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』福岡市583集 1998年
5次	0932	2010. 1. 4～2011. 4. 1	伊都区画整理	1,240.0 ㎡	古墳時代後期～古代	『徳永A遺跡』福岡市1189集 2013年
6次	1115	2011. 7.12～2011. 7.22	伊都区画整理	105.0 ㎡	縄文前期・古墳時代～古代	『徳永A遺跡』福岡市1189集 2013年
7次	1127	2011. 9.20～2011.11.21	伊都区画整理	400.0 ㎡	古墳後期・平安	『徳永A遺跡』福岡市1189集 2013年

N　大塚古墳

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	7603	1977. 2　～1977. 3	確認調査	㎡	古墳後期	『福岡平野の歴史 緊急発掘された遺跡と遺物』福岡市立歴史資料館 1977年

O　山ノ鼻１号墳

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文　　献
1次	8973	1990. 2.13～1990. 3.31	確認調査	320.0 ㎡	古墳前期	『山ノ鼻1号墳』福岡市309集 1992年
2次	9980	1990.11.17～2000. 2.23	史跡整備	363.0 ㎡	古墳前期	『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.14 福岡市　2001年

※ 第２図の内、伊都土地区画整理事業地内に所在する遺跡に限定した調査一覧である。

第１表　伊都土地区画整理事業地内調査一覧表

第３図　調査区位置図（1／2,000）

Ⅲ．調査の記録

1．概要

今回報告する今宿五郎江遺跡第14次調査区は、西区今宿町74−1、74−2、75−2、75−3に所在し、調査前の現況は標高約8.7mを測る家屋解体後の平地であった。調査地点は遺跡の南西部に位置し、隣接する北側および東側では第12次、同様に南側では第15次、西側では大塚遺跡第9次の各調査が実施され、更にその周囲でも数多くの調査が進んでいる。

「Ⅱ．遺跡の立地と環境」でも触れたように本調査区は、東西両側を南北方向に開析する谷部に挟まれた低位段丘上に占地する。東側の谷部は今宿五郎江遺跡の大半を取り囲む弥生時代後期の環濠の西側部分の掘削に先立つ狭長な谷地形で、一方の西側谷部は大塚古墳が占地する段丘を分かつ。また、第12次調査西側や第9次調査第6地点東端が段丘の尾根線にあたり、前者はその北端部に位置する。

本調査区は表土および客土のほぼ直下に花崗岩風化層に起因する遺構面があり、西側が高く、段差を伴いながら東側に向かって傾斜する。この段差は宅地化以前の耕作地の造成に伴うものと推測される。調査区の西側の大半は削平により黄白色を呈する花崗岩の風化礫層が露出し、遺構密度は希薄であるが、緩斜面が残る東側は赤〜黄褐色を呈する花崗岩の風化した粘性土が遺構面となり、遺構密度が濃い。また、南東端部を主体に遺構面上には、SX004として後述する暗褐色土の弥生時代終末期の包含層が薄く堆積していた。遺構面の標高は南西端部で8.6m、北東端部で7.0mを測る。以上から本調査区の西側は尾根に、東半部は東側の谷部に傾斜する東側緩斜面に相当する。

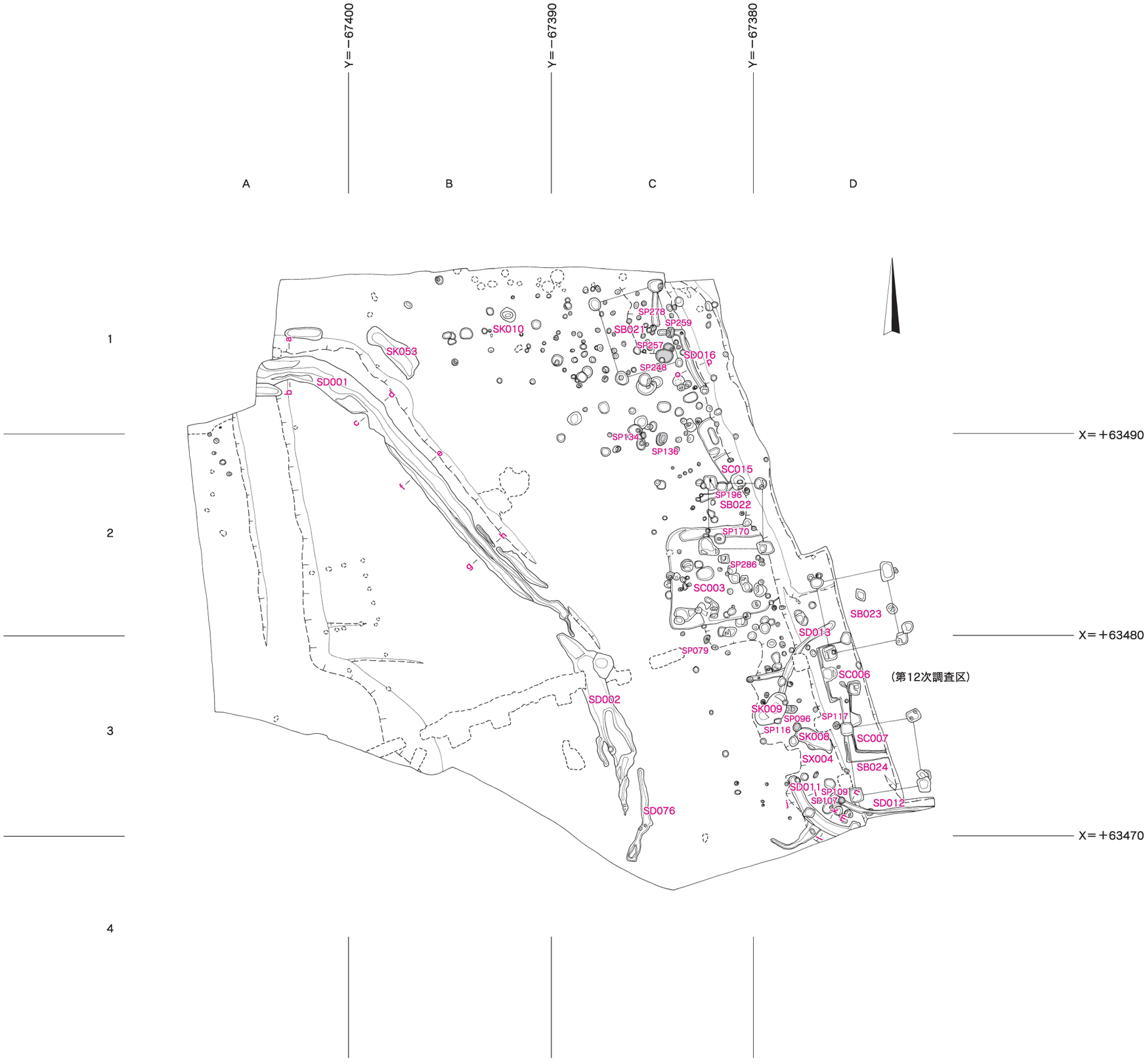
遺構検出は遺構面上面までを重機で剥ぎ取って実施したが、上述の包含層が残る南東部については、その上面までにとどめ、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、弥生時代後期の掘立柱建物や竪穴住居、土坑、溝等を主体として確認できたが、古代のピットや中世の溝も散見する。出土遺物量は、コンテナケースにして22箱である。

発掘調査は平成23（2011）年4月19日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、翌日に発掘器材やリース器材を搬入した。その後、外柵設置や壁面清掃、遺構面保護、日本測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、26日から遺構検出を開始した。順次、西側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した6月30日にラジコンヘリコプターによる全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け、重機による埋め戻し等を終え、7月13日に第14次調査を完了した。

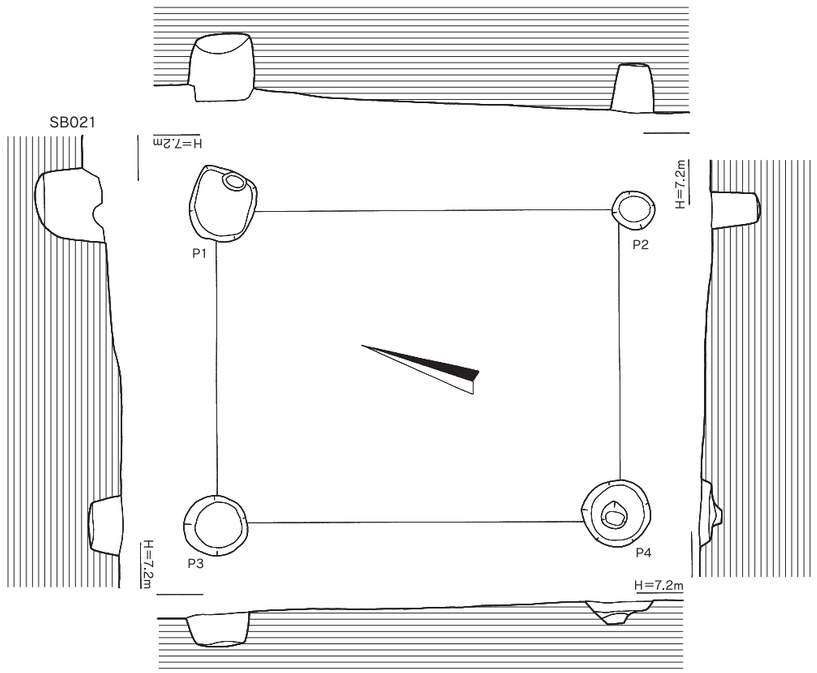
なお、調査対象面積は、「Ⅰ.−1．調査に至る経緯」のとおり、714.0㎡であったが、隣接する既往の調査区の一部を重複して表土剥ぎを行ったため、今回実際に作業を行った面積は834.2㎡であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴や竪穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP1から順に番号を付した。

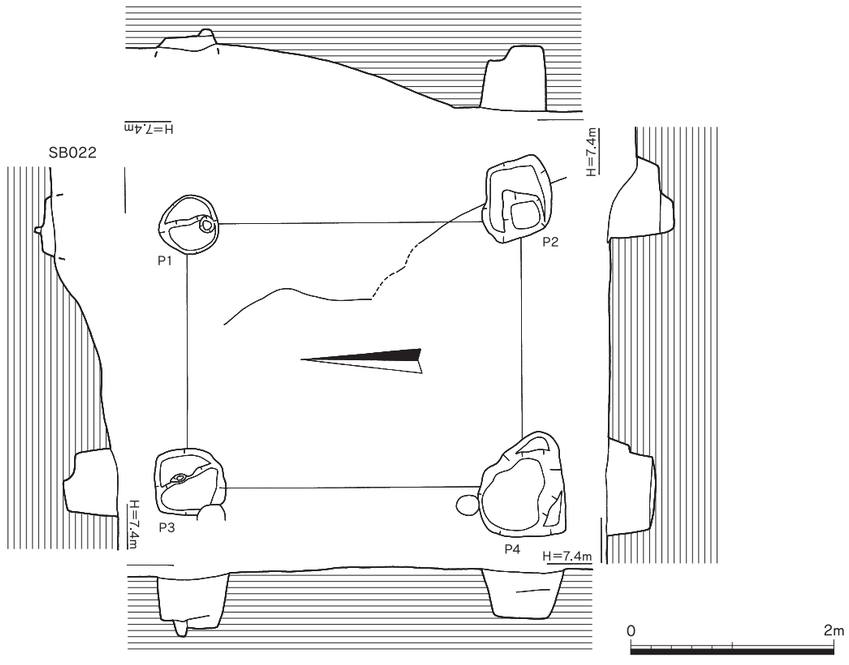
2．遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日本測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA〜D）と数字（北から南に1〜4）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第4図参照）。

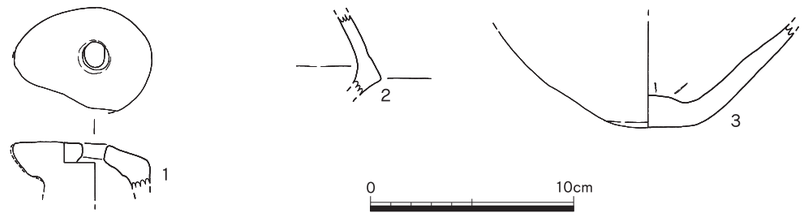


第４図　調査区全体図（1／1200）





第５図　SB021・022実測図（1／60）



第６図　SB021・022出土遺物実測図（1／3）

１）掘立柱建物（SB）

以下、調査区東端部の緩斜面上で確認した南北棟の1×1間の掘立柱建物4棟を報告するが、うち2棟は東接する第12次調査区でその一部が報告されているものである。なお、以下の建物主軸方位は座標北からの偏差である。また、各柱穴の覆土は暗灰茶褐色土を主体とする。

SB021（第5図）調査区北東のＣ－1に位置する1×1間の建物で、方位はＮ－18°－Ｗである。柱間は梁間3.0m、桁行4.0mを測る。柱穴はＰ1が一辺約0.6mの隅丸方形であるが、他は径0.4～0.6mの円形を呈し、深さ0.2～0.6mを測る。

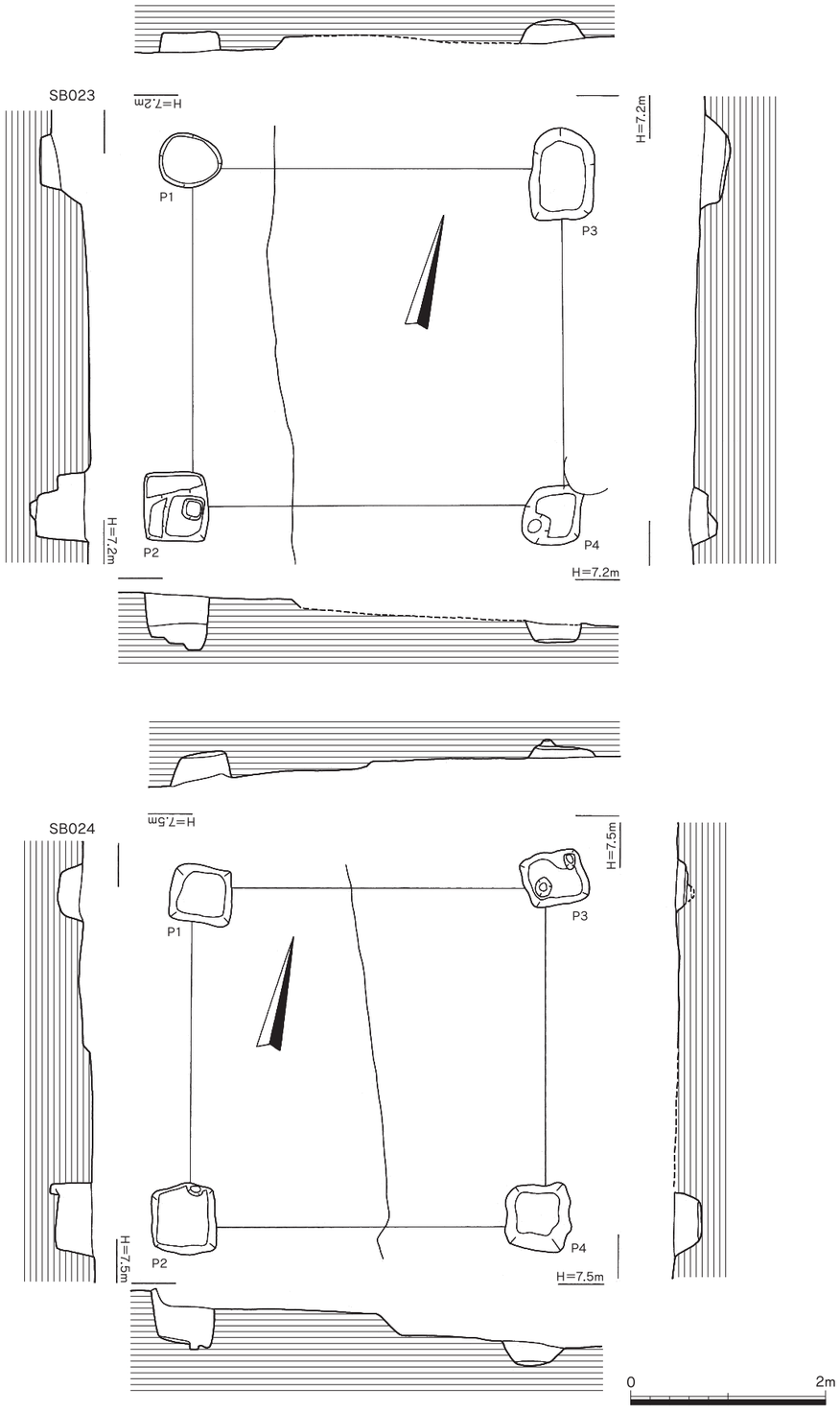
出土遺物（第6図1）Ｐ2出土の弥生土器の沓形支脚で、上面のみが遺存するため、傾きが不明確である。片側に突起、中央部に径1.2cmの孔を有する。外面はナデ、内面は指オサエ調整を施す。他に各柱穴から弥生土器片や黒曜石剥片が少量出土している。弥生時代後期から終末期の建物であろう。

SB022（第5図）調査区東端のＣ･Ｄ－2で確認した。1×1間の建物方位はほぼ座標北で、Ｐ3・Ｐ4はSC003を切る。柱間は梁間2.5m、桁行3.3mである。柱穴はＰ1が円形、Ｐ2・Ｐ3が隅丸方形、Ｐ4は不整な方形を呈し、規模は径や一辺が0.6～0.8mを測る。Ｐ1は段落ちによって上部を削平されるが、他は深さ0.5～0.6mが残る。

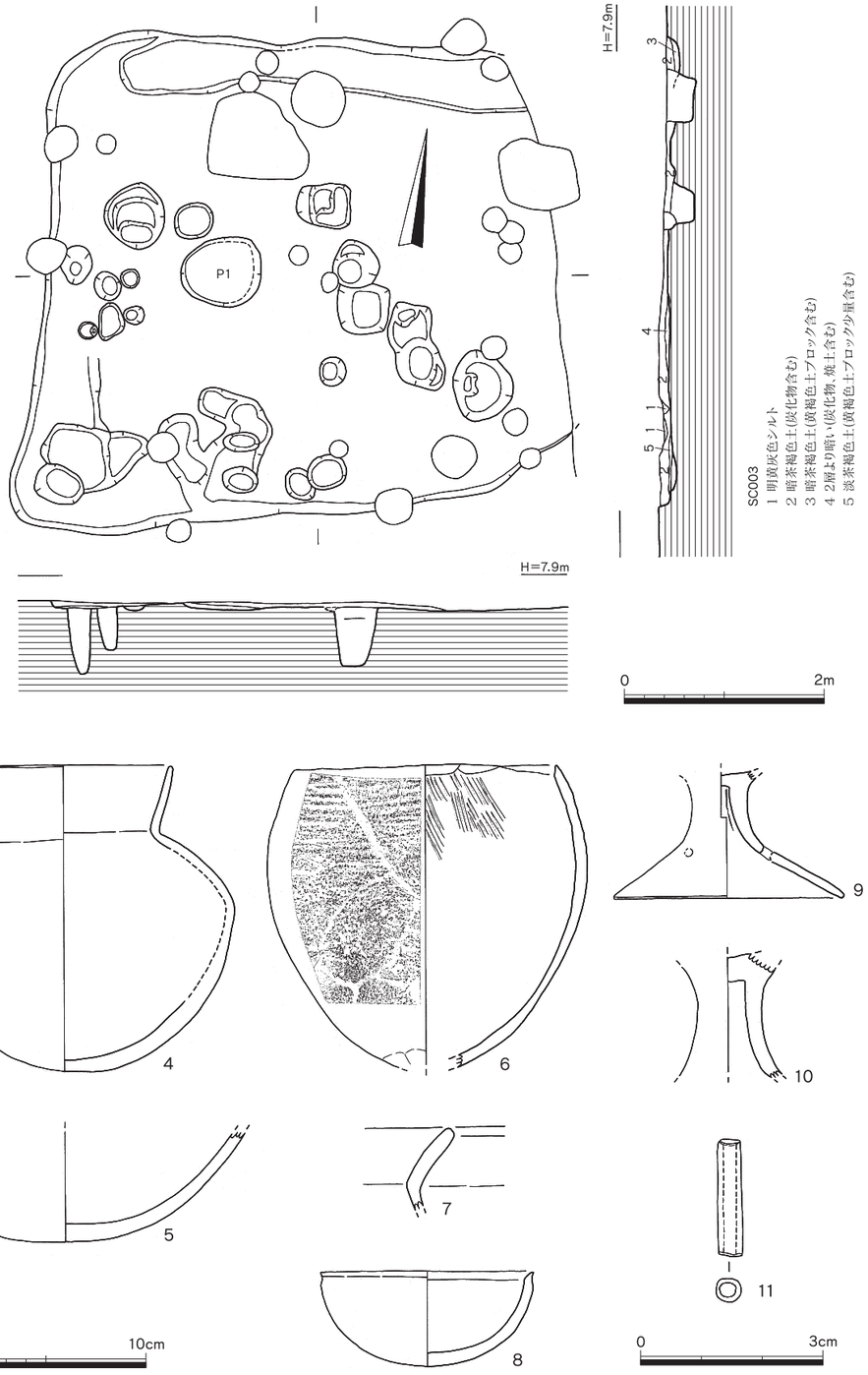
出土遺物（第6図2･3）共に弥生土器である。2はＰ2出土の複合口縁壺の屈曲部片で、外面の稜線はシャープである。器面は風化が著しい。3は凸レンズ状の底部を呈する甕である。器面の風化が進むが、内面にヘラナデ調整の痕跡が残る。Ｐ4出土である。他に各柱穴から弥生土器の甕や高坏等の細片が出土している。弥生時代後期後半頃の遺構に位置付けられよう。

SB023（第7図）Ｄ－2・3で検出した1×1間の正方形に近い建物で、柱間間隔は東西が3.8m、南北が3.5mとやや東西方向が長く、Ｎ－12°－Ｗの方位をとる。Ｐ2はSC006に後出する柱穴である。今回の調査区では4基の柱穴の内、西側のＰ1・Ｐ2を検出し、東側のＰ3・Ｐ4は第12次調査において確認されていた柱穴である。なお、同調査においては、Ｐ3（同SP-137）とＰ4を北東側で切る別の柱穴（同SP－139）をもって、SB－03の東側柱列として報告されているが、柱穴の配列からＰ4（同SP－140）を採用し、今回あらたにSB023として報告するものである。柱穴の平面プランは、Ｐ1が円形、他は方形状を呈し、径や一辺は0.6～0.9mを測る。深さはＰ2が0.55m、他は段落ちによる削平を受け、約0.2m程度しか遺存しない。出土遺物は今回調査のＰ1･Ｐ2からは弥生土器の細片が出土しているが、Ｐ3（SP－137）からは土師器坏が出土しており、古代以降の所産と思われる。

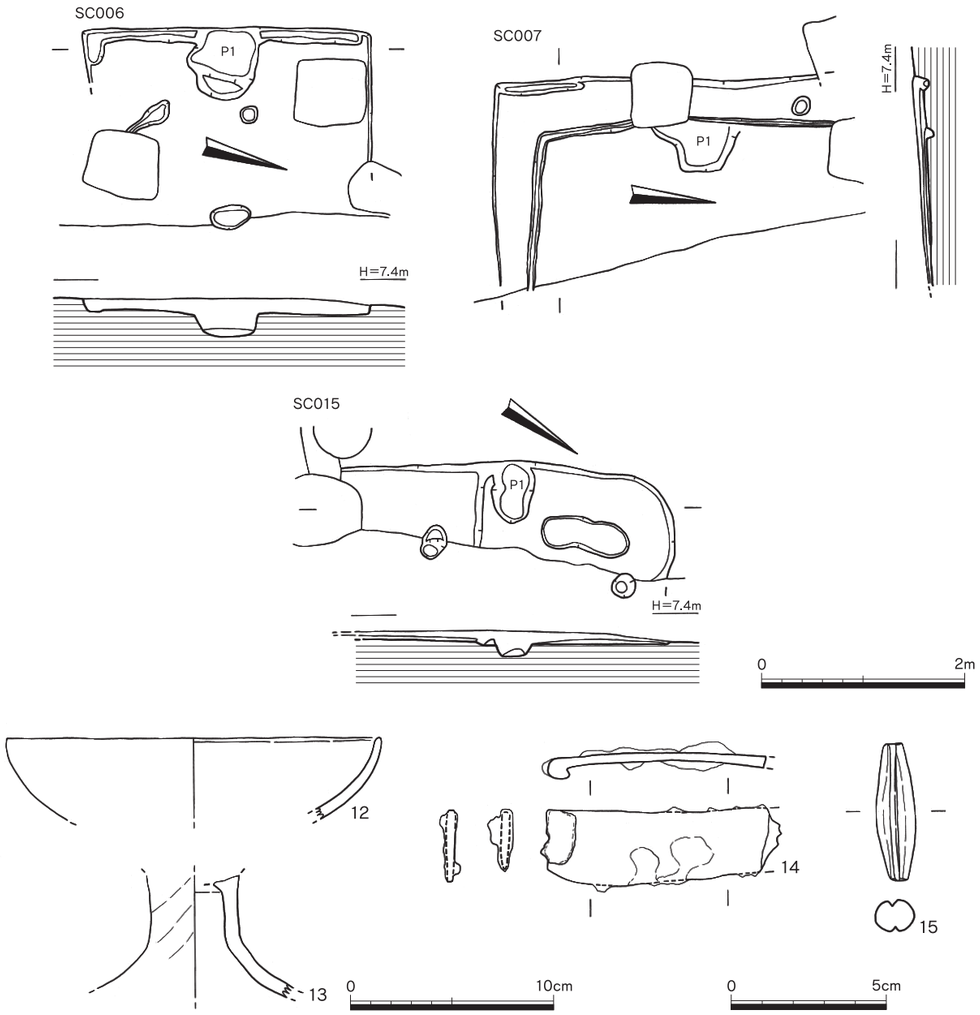
SB024（第7図）調査区南東端のＤ－3に位置する。SB023と同様に東側のＰ3・Ｐ4は第12次調査で検出された柱穴（同調査では順にSP－146・SP－149）で、同調査では西側への展開を予測した上で、SB－01として報告されている。今回の調査によって東側の柱穴Ｐ1・Ｐ2を確認できたことから、ここではSB024として報告する。SB023と類似したＮ－11°－Ｗの方位を有し、南



第７図　SB023・024実測図（1／60）



第８図　SC003実測図（1／60）および出土遺物実測図（11は1／1、他は1／3）



第９図　SC006･007･015実測図(1／60)およびSC006出土遺物実測図(14･15は1／2､他は1／3)

北方向に並ぶ。また、同様に正方形に近い柱間間隔で、東西が3.6m、南北が3.5mを測る。Ｐ1はSC007を切る。各柱穴の平面プランは一辺0.6m前後の比較的端正な隅丸方形を呈し、深さ0.2～0.5mを測る。Ｐ3・Ｐ4は上部を削平される。Ｐ3・Ｐ4を含めて細片の弥生土器が出土しているが、SB023との類似性や位置関係から古代に下る可能性が高い。

２）竪穴住居（SC）

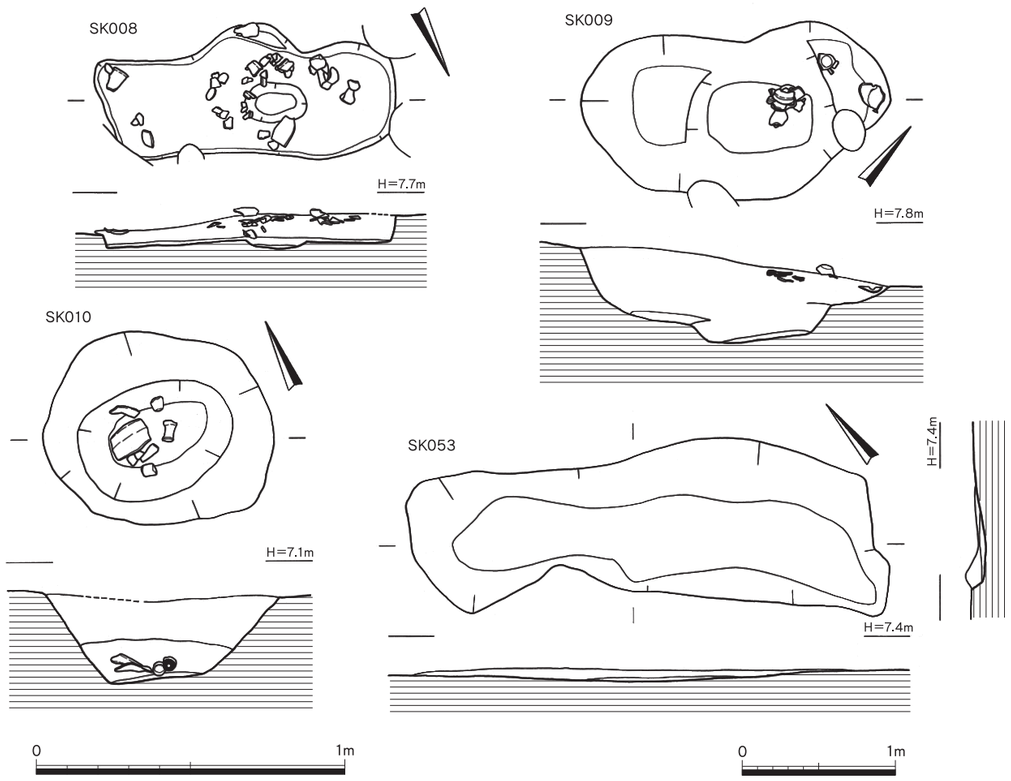
掘立柱建物同様に調査区の東端において方形プランの竪穴住居4軒を確認することができた。

SC003（第8図）Ｃ・Ｄ－2で検出したが、東端部は段落ちによって削平される。SB022の柱穴との切り合い関係から、同遺構に先行する。南北方向の長さは4.5～5.0m、東西では5.3m以上を測り、東西方向にやや長い長方形プランを呈するものと推定される。北西および南西のコーナー

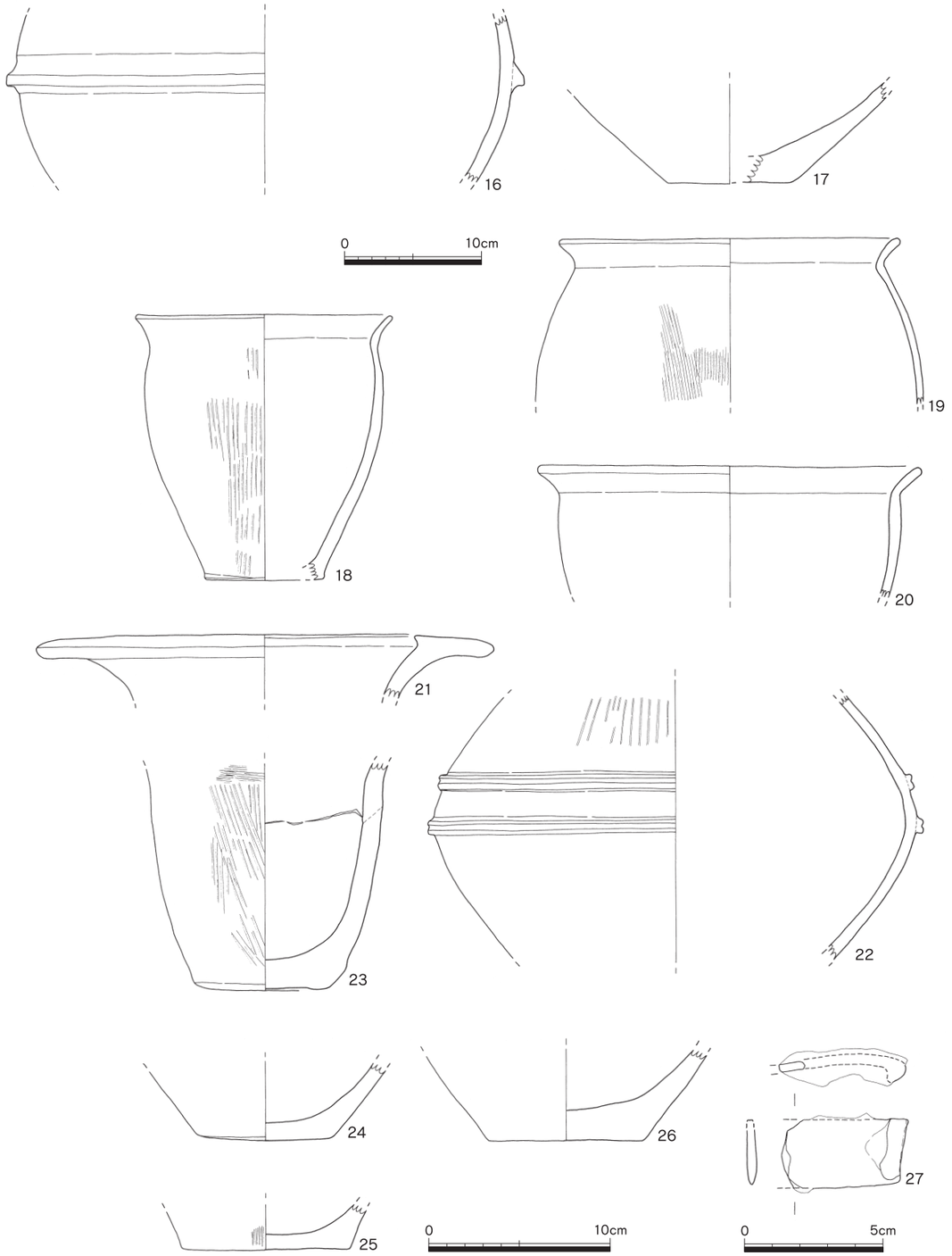
は隅丸状にカーブする。壁面の高さは0.1m程度で、削平がおよぶ。土層観察では明瞭な貼床は確認できなかった。床面では北側壁面に沿って、幅約0.5m、深さ0.15mの幅広の壁溝が設けられる。また、中央西側の深さ0.05mを測るＰ1は覆土に焼土や炭化物を含み、周囲に焼土が散在する状況が認められたことから、屋内炉と考えられる。床面では他に多数の円形もしくは楕円形のピットを検出したが、主柱穴は明らかではない。

出土遺物（第8図）4～10は弥生土器である。4は丸底状の底部と扁球状の胴部から直線的に開く頸部が続く壺で、口縁部はそのまま納める。内外面共に器面は著しく風化する。5も壺と考えられる丸底の底部で、同様に器面が荒れる。6・7は甕である。6は口縁部と底部を欠損する小形のもので、器面の風化が進むが、体部外面の上半には横方向の叩き目、内面には刷毛目調整が認められる。7は「く」字状を呈する口縁部の小片で、内外面の稜はやや鈍い。8は丸底の鉢で、口縁端部を僅かに外反させる。9は高坏もしくは台付鉢の脚部で、中位に円形の透かしの一部が残る。10は高坏の脚部である。7～10は器面が荒れており、調整は不明である。11は碧玉製管玉の完形品で、長さ1.9cm、径0.4cm、孔径0.2cmを測る。他にも弥生土器が出土しているが、細片が多い。以上の出土遺物から弥生時代終末期の遺構と考えられる。

SC006（第9図）Ｄ－3に位置する方形住居で、南接するSC007を切り、SB023のＰ2に切られる。また、東側は段落ちによって削平されるため、西側の一部が遺存するにとどまり、一辺2.9m、壁面の高さ0.1mを測る。西側の壁面には幅約0.1m、深さ0.05mの浅い壁溝があり、中央には深



第10図　SK008・009・010・053実測図（SK010は1／20、他は1／40）



第11図　SK008・009出土遺物実測図（16・19は1／4、27は1／2、他は1／3）

さ約0.2mを測る不整形の屋内土坑Ｐ1が設けられる。床面にはピットが数個散在するが、いずれも浅く、主柱穴とは言い難い。

出土遺物（第9図）12・13は弥生土器である。12は復元口径18.2cmを測る素口縁の鉢で、端部は丸味を帯びる。内面はナデを施すが、外面は器面が風化する。13は高坏もしくは台付の器種の脚部で、器面の荒れにより調整は不明である。14は鉄製摘鎌で、片側の短辺を欠損する。幅2.5cm、残存長7.9cmを測り、遺存する短辺は幅0.8cmを折り返す。刃部はやや外湾気味である。15は紡錘形を呈する泥岩製有溝石錘の完形品で、長さ4.5cm、径1.0～1.3cm、重量7.5gを測る。13～15はＰ1から出土した。弥生時代後期後半から終末期の遺構であろう。

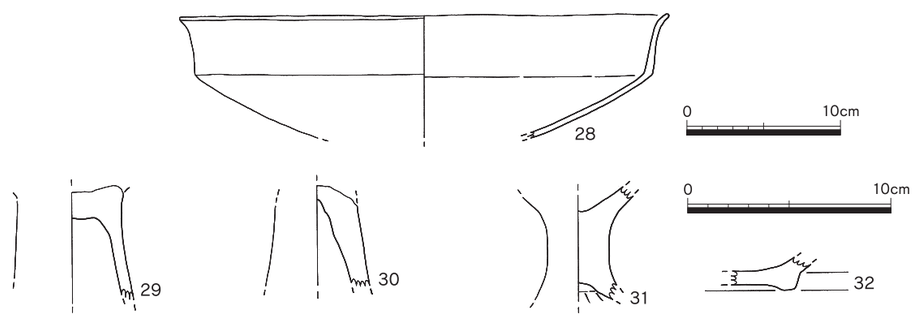
SC007（第9図）Ｄ－3で確認した方形住居で、北西側をSC006に、西側の壁面をSB024のＰ1に切られ、更に東側を段落ちによって削平されることから、南西側のみが遺存する。深さは0.15mである。屋内には西側と南側の壁面に沿って幅0.3～0.4m、床面からの高さ0.1m未満の低いベッド状遺構が地山削り出しによって設置される。また、その下端部には幅0.05m、深さ0.1m前後の細い溝が巡り、西側の中央部には不整形な深さ0.2mを測る掘り込みＰ1を有する。また、ベッド上にも南西コーナーから北側に延びる短い壁溝が検出できた。なお、主柱穴と考えられるものは認められない。出土遺物には弥生土器が少量あるが、いずれも細片である。

SC015（第9図）Ｃ－1･2で検出したが、東側を段落ちによって削平され、南側を別遺構によって切られるため、北西部分しか遺存しない。そのコーナーは隅丸のカーブを描き、壁面の高さは0.1～0.15mを測る。西側の壁面沿いには屋内土坑と考えられる楕円形プランを呈する深さ0.15mのＰ1が認められた。床面の中央部に東西方向の落ちがあるが、鈍い段である。なお、出土遺物には弥生土器の細片が少量ある。

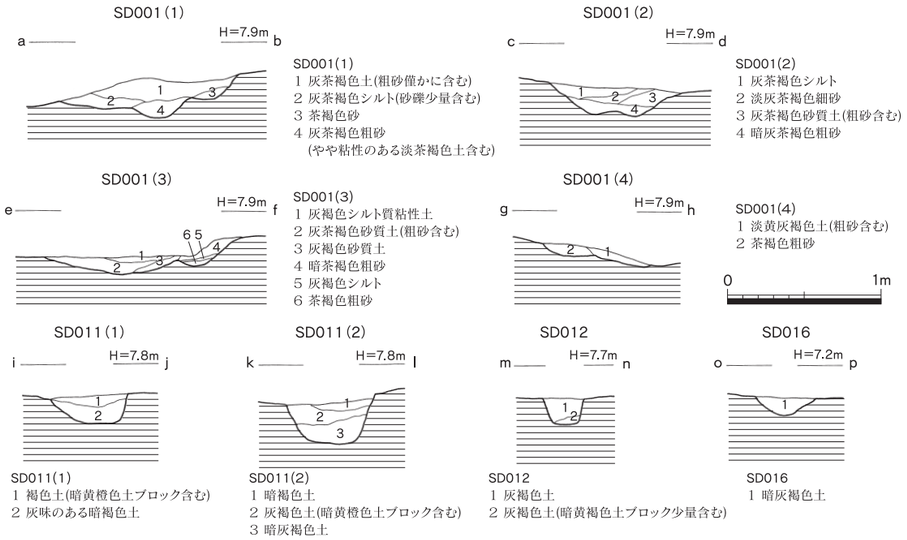
３）土坑（SK）

SK008（第8図）Ｄ－3に位置する土坑で、北西隅をSP116に切られる。また、後述する包含層SX004との前後関係は不明瞭ながら、その除去後に検出した遺構である。平面プランは不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.0m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。壁面は急で、南側の中央部には狭いテラスを設ける。底面はほぼ平坦であるが、中央部に浅いピット状の掘り込みを有する。覆土は暗茶褐色土を主体とし、上層の中央から西側で土器が集中して出土した。

出土遺物（第11図16～20）いずれも弥生土器で、この内16・17は壺である。16は胴部片で、最大径位置に断面台形状の突帯を貼付する。17は平底の底部で、胴部との境界はやや鈍い稜線である。共に器面が風化する。18～20は甕である。18は器高19.5cmを測る小形のもので、外反す



第12図　SK010・053出土遺物実測図（28は1／4、他は1／3）



第13図　SD001・011・012・016実測図（1／40）

る口縁部の稜は内外面共に鈍い。器面が荒れるが、外面には縦方向の刷毛目が残る。19は「く」字状の口縁部から胴部が大きく張り出す。外面には刷毛目の痕跡が認められるが、内面は器面が風化する。20は18に類似した口縁部形態を呈するもので、胴部の張りが弱い。器面の剥落が著しい。以上の出土遺物から弥生時代後期前半から中頃の遺構と考えられる。

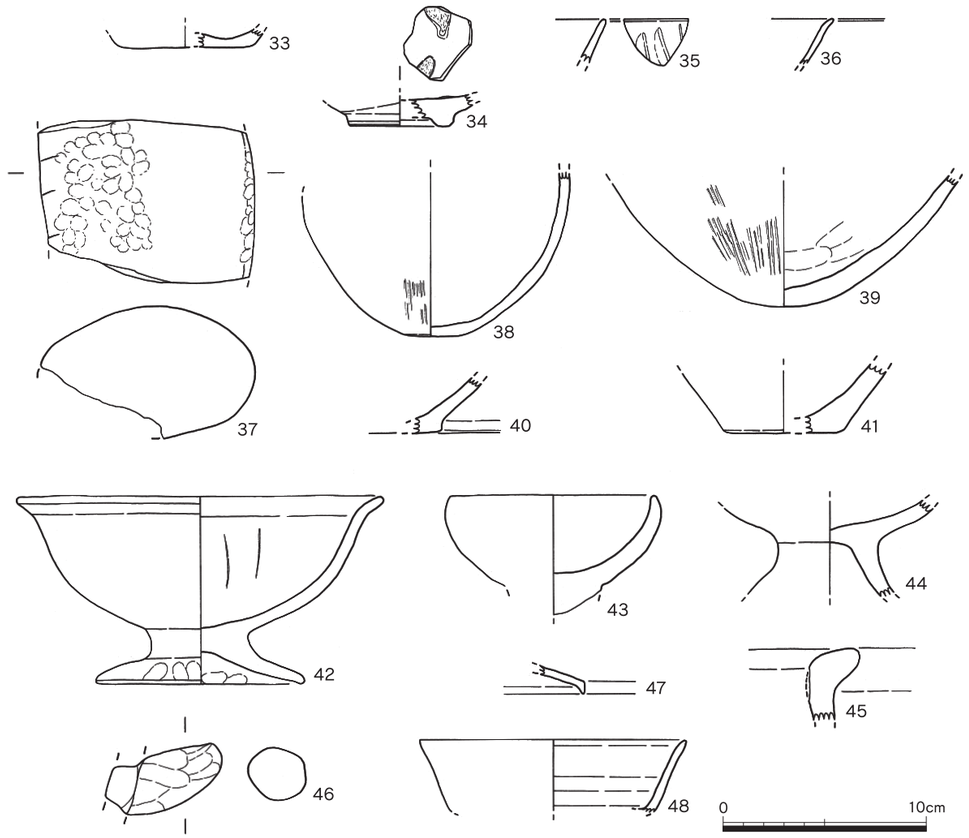
SK009（第10図）SK008の北西1.5mのＤ－3で確認した不整な楕円形プランの土坑で、SX004除去後に検出した。後述のSD013とは重複するが、前後関係は明確ではない。長径2.0m、短径1.1mを測る。東西の壁面にテラスを設け、中央部は深く掘り込まれる。最深部の深さは上面から0.6mを測る。覆土は上層が暗茶褐色土、下層が暗褐色土を主体とし、北東側上層では土器がまとまって出土した。

出土遺物（第11図21～27）27を除いて弥生土器で、21・22は壺である。21は鋤形口縁の広口壺の口縁部で、器面が風化するが、内外面に赤色顔料が僅かに残る。22は断面「M」字状の突帯を2条胴部に添付し、外面には赤色顔料が塗布される。上半部には暗文を施す。23は口縁部を欠失する樽形の甕で、全体に器壁が厚い。器面が荒れるが、外面には刷毛目調整が残る。底部と胴部の境界はやや丸味を帯びる。24～26は底部片である。24・26は平底であるが、25は僅かに凸面をなす。27は銹化の進む鉄製摘鎌で、片側の短辺は欠損する。幅2.5cm、残存長4.7cmを測り、遺存する短辺は幅約1.0cmを折り返す。中期の土器が混入するが、弥生時代後期中頃の遺構と推定される。

SK010（第10図）Ｂ－1で検出した小形の土坑である。平面プランは径0.7m前後の楕円形をなし、断面は逆台形を呈する。深さは0.3mで、茶褐色土の覆土下層を主体に弥生土器が出土した。

出土遺物(第12図28～31）28～30は高坏で、器面が風化する。28は坏部で、屈曲部の上位は直立気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。29・30は脚部の上半である。31は台付の器種の脚部と思われるもので、外面はナデを施す。弥生時代後期中頃の土坑に位置付けられよう。

SK053（第10図）調査区北西のＢ－1に位置する。長さ3.0m、幅1.0m、深さ0.1mの浅い溝状の土坑で、明灰茶褐色シルトに粗砂を含む水性堆積の覆土である。



第14図　SD001・002・011・012・013・016・076出土遺物実測図（1／3）

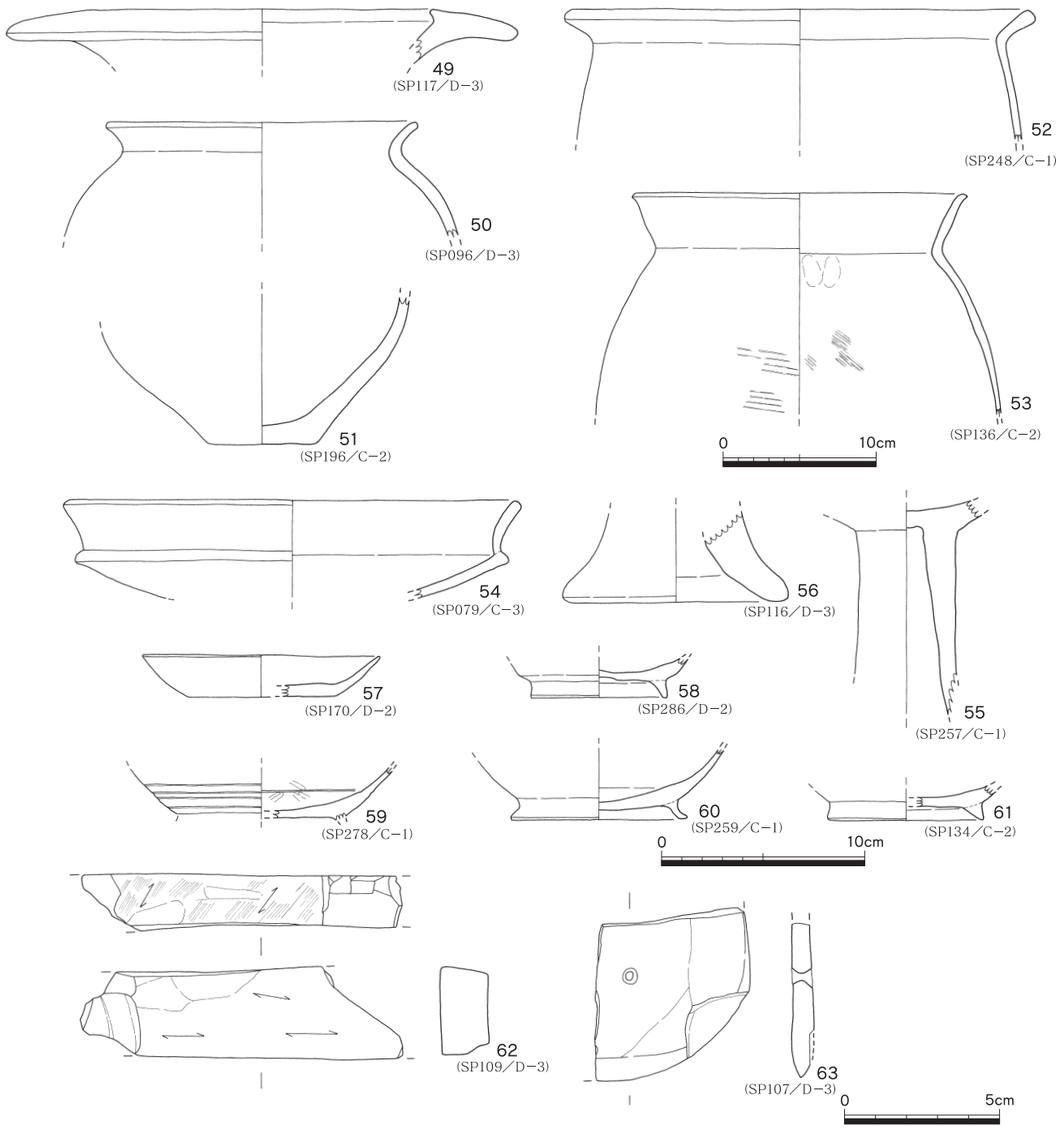
出土遺物（第12図32）高台を浅く削り出す白磁碗Ⅳ類の底部片である。他に土師器や須恵器の細片が少量出土している。中世前半期の所産であろう。

４）溝（SD）

SD001・002・076（第4･13図）調査区のほぼ中央部を北西－南東方向に延びる溝で、幅は0.4～1.2mを測る。断続することから、北西側から順に001、002、076の番号を付した。いずれも覆土には粗砂やシルト等の水性堆積物が顕著で、底面に凹凸が多いことから、流路と考えられる。東側の段落ちに並走する。

出土遺物（第14図33～36、37、46～48）33～36は001、37は002、46～48は076出土である。33は土師器小皿であるが、外底部の切り離し技法は風化のため不明である。34～36は青磁の細片である。34は見込みに目跡を残し、外面は露胎である。35は外面に片彫りを施すが、貫入が多く不鮮明である。36は口縁部を僅かに外反させる。37は玄武岩製太型蛤刃石斧の折損品で、敲打痕が認められる。46は土師器甑の把手、47・48は須恵器である。47は坏蓋の口縁部で、端部が直角に折れる。48は坏身の体部で、ヨコナデ調整を施す。他に弥生土器や白磁、鉄滓、銅銭の細片等が出土している。中世以降の所産であろう。

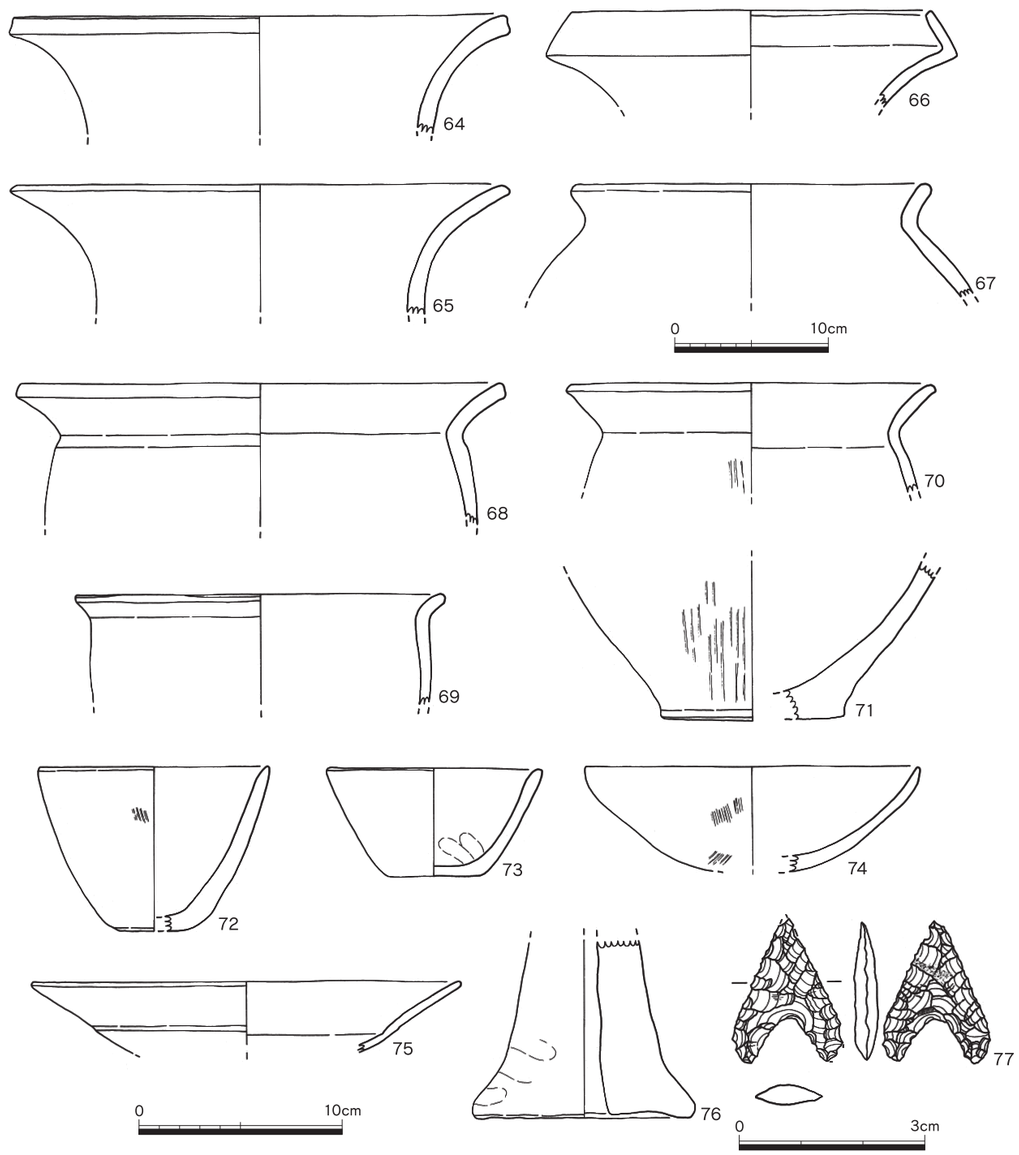
SD011（第4･13図）調査区の南東端のＤ－３で検出したSX004に先行する弧状の溝で、南東



第15図　ピット出土遺物実測図（53・54は1／4、62・63は1／2、他は1／3）

側は調査区外に延び、第15次調査区で延長部が確認されている。北西部で立ち上がるが、位置関係から後述のSD013と一連の溝の可能性が高く、SC006もしくはSC007の外周を取り囲むものであろうか。幅は0.6m前後で、断面は逆台形を呈する。深さは0.2〜0.3mを測り、南東側に向かって低くなる。

出土遺物（第14図38･39）共に丸底の弥生土器で、39はやや尖り気味の形態である。器面の剥落が進むが、外面に刷毛目が僅かに認められる。他にも弥生土器や黒曜石の剥片が少量出土している。弥生時代終末期頃の溝であろう。

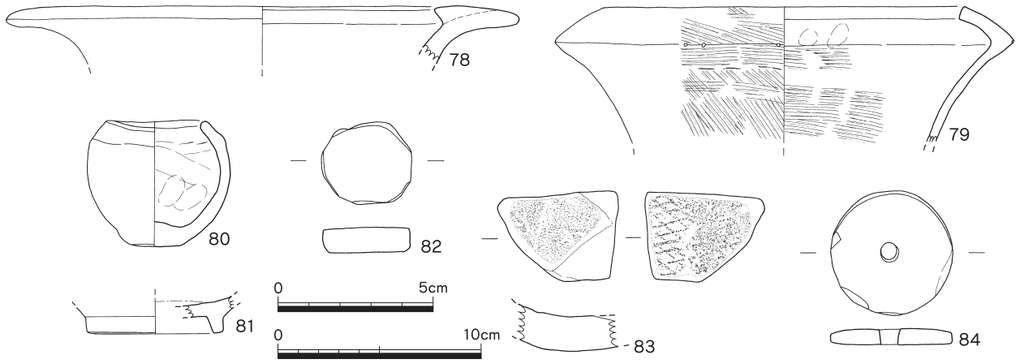


第16図　SX004出土遺物実測図（67は1／4、77は1／1、他は1／3）

SD012（第４･13図）SD011の北東側に位置する幅0.2〜0.3mの溝である。北西側では緩く弧を描き、東側ではほぼ直線的に延びて調査区外に延伸する。断面は逆台形を呈し、北西部では深さ約0.2m、東側では削平により浅くなるが、底面のレベルは東側が低くなる。SX004に先行する。

出土遺物（第14図40･41）共に弥生土器の甕底部片で、器面が剥落する。他にも弥生土器が出土しているが、細片である。弥生時代後期以降であろう。

SD013（第４図）Ｄ−２・３で確認した緩い弧状の溝で、SD011で述べたように同遺構と一連



第17図　遺構検出時出土遺物実測図（82・84は1／2、他は1／3）

の可能性がある。北東端部は削平により収束し、また南西端部はSK009と重複するが、前後関係は明らかではない。南西側では幅0.4m、深さ0.25mを測り、北東側では削平がおよぶが、底面のレベルは北東に向かって低くなる。断面は逆台形をなす。

出土遺物（第14図42～44）いずれも弥生土器の台付鉢で、器面が風化する。42は口縁部が外反する鉢に低脚の台が付く。43は体部が内湾する鉢に台が付くが基部で欠損する。他に弥生土器の細片や黒曜石の剥片が少量出土している。弥生時代終末期頃の溝と考えられる。

SD016（第4・13図）C－1で検出したSP259に先行する「L」字形の溝で、南東側は段落ちによって削平され、西側は端部となる。幅0.3m前後、深さ0.1m、断面は皿状を呈する。

出土遺物（第14図45）弥生土器の器台片で、受部として図化したが、天地は不明である。風化する器面には凹凸があり、指オサエによる調整と思われる。他に弥生土器の細片が少量出土している。

5）その他の遺物

最後にピット（SP）、包含層（SX004）、遺構検出時の出土遺物について報告を行う。

ピット（第15図）49～56は弥生土器で、49～51は壺、52・53は甕、54・55は高坏、56は器台である。49の口縁部上面には赤色顔料が残る。57～61は古代末の土師器で、57は回転ヘラ切り底の坏、58は椀、59～61は黒色土器椀である。62は粘板岩製砥石、63は頁岩質の石庖丁である。なお、出土ピットは、遺物番号の下にグリッド名と共に記載している。

SX004（第16図）「Ⅲ.－1．概要」で述べたように調査区南東部の緩斜面上に薄く堆積する暗褐色土の包含層の呼称で、弥生時代後期から終末期の遺物を含む。64～76は弥生土器で、64～67は壺、68～71は甕、72～74は鉢、75は高坏、76は器台である。77は先端部と基部を欠損する黒曜石製の石鏃である。

遺構検出時（第17図）78～80は弥生土器で、78は鋤形口縁、79は複合口縁の壺である。80はミニチュアの土器の無頸壺で、不安定な平底が付く。81は白磁碗で、見込みの釉を輪状にカキ取る。82は土器の周縁を打欠き整形した土製品、83は斜格子目叩きの平瓦、84は結晶片岩製の紡錘車である。

3．結語

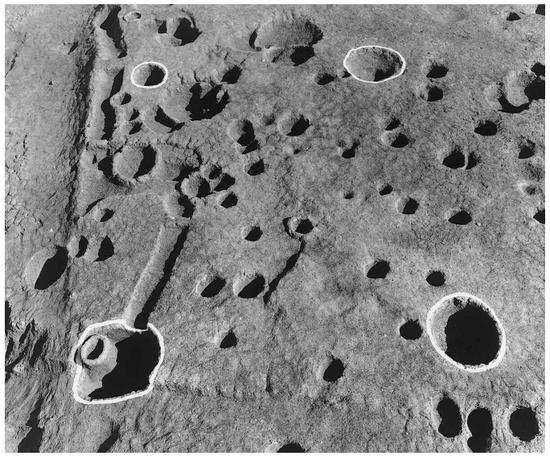
今回確認した東側緩斜面に残る弥生時代後期後半から終末期の竪穴住居や掘立柱建物等で構成される集落は、第11・12・15次調査等で検出されている弥生時代後期の環濠がほぼ埋没した後に環濠外部に出現、成立する集落の一端で、第12・15次、大塚遺跡第11次と一連の集落域にあたる。なお、出土遺物からの詳細な時期差は不明であるが、本調査区内での竪穴住居は掘立柱建物に先行する。

図　　版

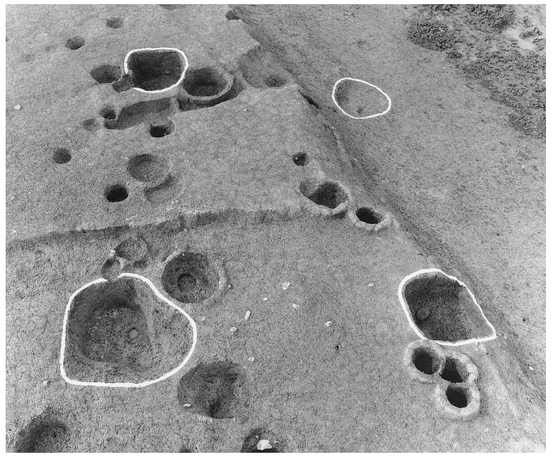
作業風景

調査区全景（上空から）

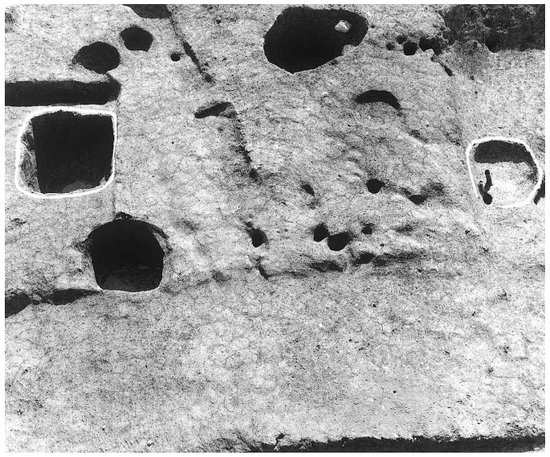
＊上が北



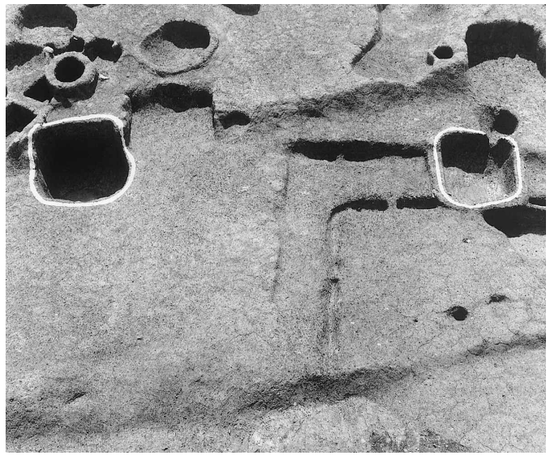
（1）SB021（北から）



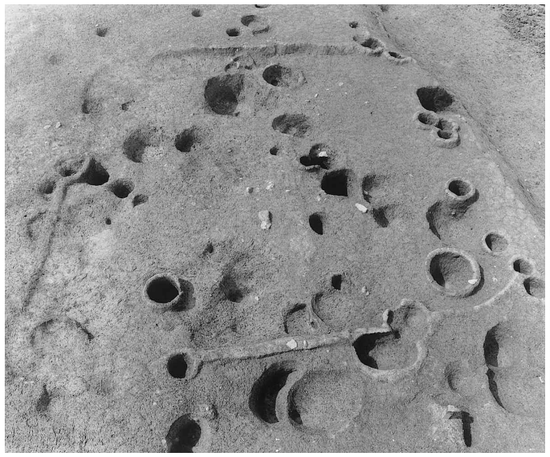
（2）SB022（南から）



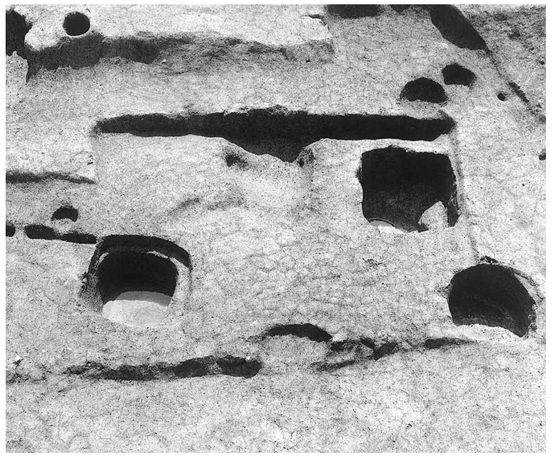
（3）SB023（東から）



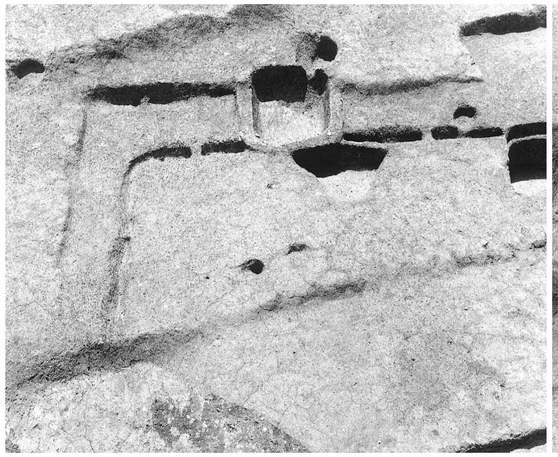
（4）SB024（東から）



（5）SC003（南から）



（6）SC006（東から）



（1）SC007（東から）

（2）SK008（南から）

（3）SK009（北西から）

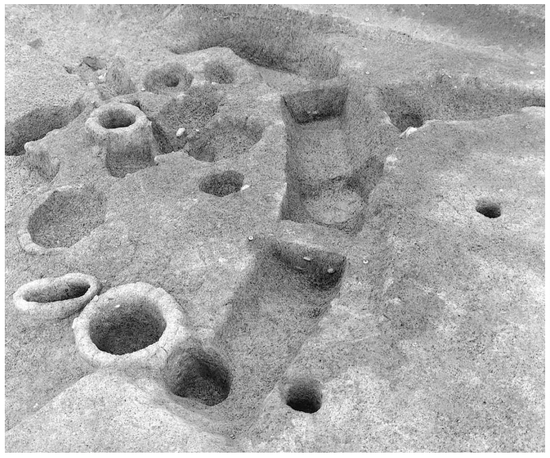
（4）SK010（南西から）

（5）SD001（南東から）

（6）SD001a－b土層（西から）

（1）SD001 c－d土層（南東から）

（2）SD001 e－f土層（北西から）

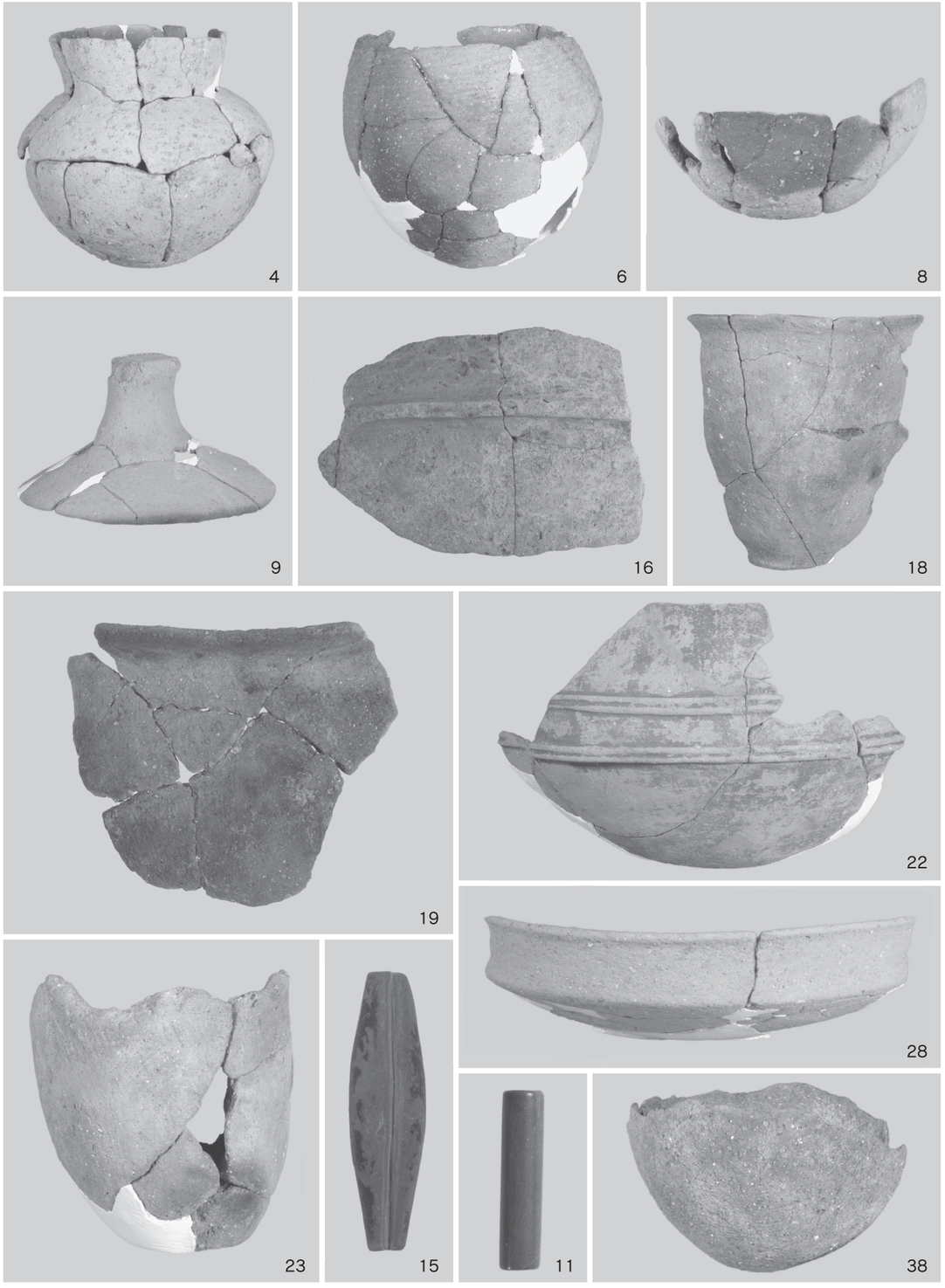


（3）SD011（南西から）

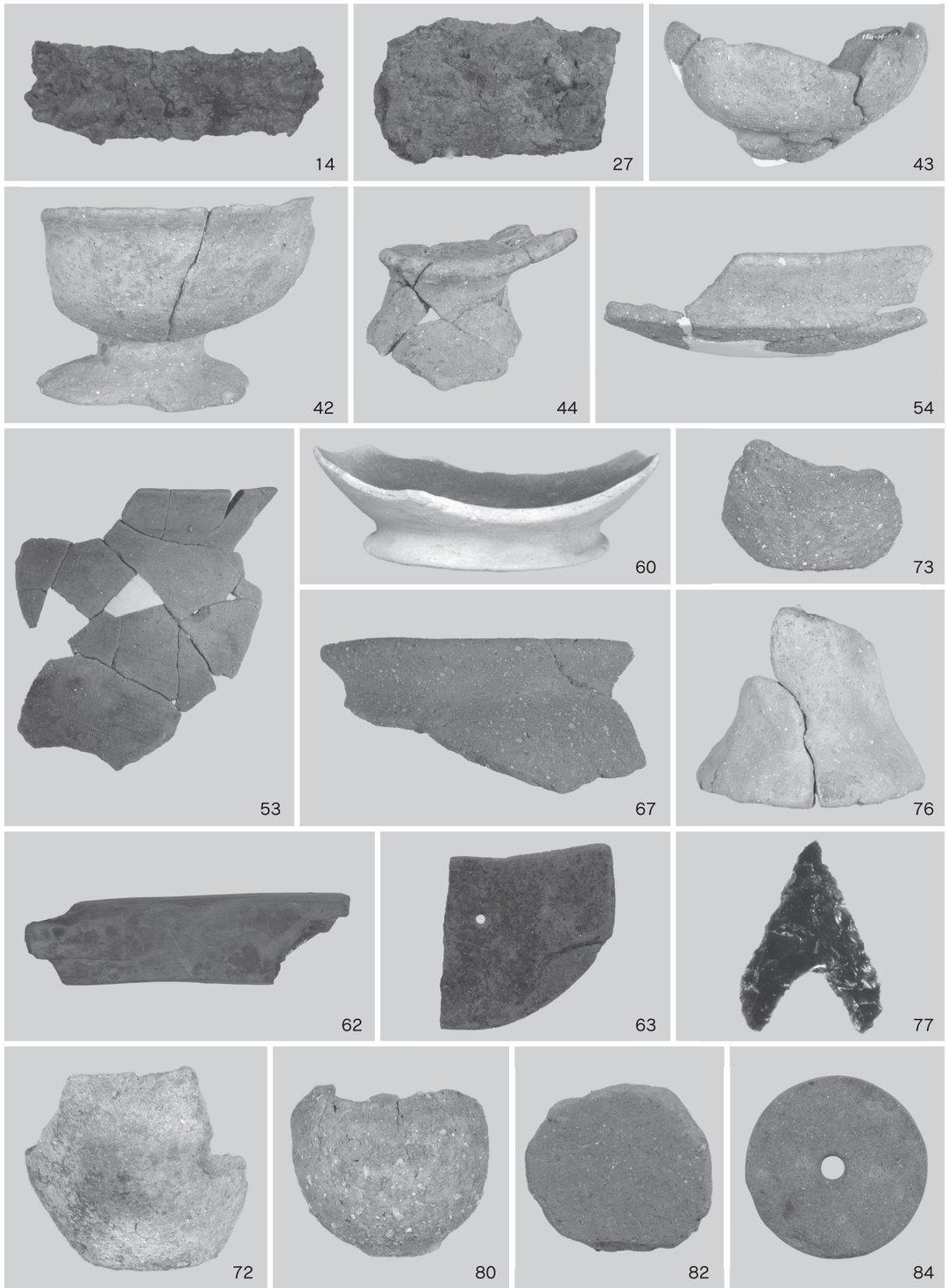
（4）SD012（北西から）

（5）SD013（東から）

（6）SD016 o－p土層（南から）



出土遺物（1）



出土遺物（2）

報告書抄録

ふ　り　が　な	いまじゅくごろうえ14　ーいまじゅくごろうえいせきだい14じちょうさほうこくー
書　　名	今宿五郎江14
副　書　名	―今宿五郎江遺跡第14次調査報告―
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1182集
編　著　者　名	榎本　義嗣
編　集　機　関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810－8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号　　TEL 092－711－4667
発 行 年 月 日	2013年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
いまじゅくごろうえいせき 今宿五郎江遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくいまじゅくまち 西区今宿町	40135	020626	33°34′25″	130°16′18″	20110419 ～ 20110713	834.2	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今宿五郎江遺跡	集落	弥生時代	掘立柱建物、 竪穴住居土坑、溝	弥生土器、鉄器、石製品	弥生時代後期から 終末期の集落を確認

要　約	福岡市西部の小平野である今宿平野東側の低位段丘上で実施した調査で、東側緩斜面を主体に弥生時代後期後半から終末期にかけての掘立柱建物や竪穴住居等から構成される集落を確認した。周辺調査の成果から調査区東側に巡る後期初頭に掘削された環濠が埋没した後にその外側に出現し、展開する集落の一端である。

今宿五郎江 14

—今宿五郎江遺跡第14次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1182集

2013（平成25）年3月22日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
（092）711－4667

印刷　ソウヤマ印刷
福岡市博多区中呉服町10－5
（092）291－6160